



第561号 発行:自治労連千葉県本部 千葉市中央区長洲1-10-8 自治体福祉センター内 TEL 043-227-9393 FAX 043-227-6060 URL http://www.jichiroenchiba.jp/ 責任者・竹内 敏昭 編集長・貫川 理

青年部 未来ツアー2020in熱海

日時:2020年

1月25日(土) ~26日(日)

料金:13,000円

(交通費・ツアー費は含みません) (補助等は単組にご相談ください)

場所:熱海市

内容

【1日目】

講演①「A-biz」 ◆事業者支援

講師:長谷川さん(熱海市役所産業振興室長)

講演②「ADさん、いらっしゃい」 ◆広報戦略

講師:山田さん(熱海市役所支支援担当)

交流 ★県内自治体+静岡の青年とじっくり交流

【2日目】

講演③「リハ-ションまちづくり」 ◆空き店舗活用

講師:市来広一郎さん(株式会社machimori 代表取締役。『熱海の奇跡』著者)

まちづくりフィールドワーク

解散(12:00)

オプションツアー-

Aコース:MOA美術館

Bコース:熱海梅園&来宮神社

Cコース:熱海城&トリアート迷宮館

問い合わせ・申し込み:各単組組合事務所または自治労連千葉県本部(043-227-9393)まで

収集車にごみを投入する青木さん(写真中央)



鋸南地区環境衛生労働組合

9月9日朝、到着するとクリーンセンターはめちゃくちゃ。搬入スロープは倒木・落石で通行できず、車庫のシャッターは崩壊、壁は崩れ、可燃ごみを貯めるごみピットの扉が停電で開かず、焼却炉は稼働できない状況でした。重機とチェーンソーで2日ばかりで場内を片付けました。

可燃ごみの収集は、2日後から再開。焼却炉はダメでもすぐに収集再開

はできないため、ピットにごみを投入するためのプラットホームに、シートを敷いてごみを積み上げました。収集量は1日で20トン程にもなりました。携帯電話も固定電話も通じませんでした。電話で話せないため本庁から被害状況の確認には来てくれませんでした。対応方針はその場では示されなかったため、もどかしさがありました。災害時対応マニュアルを改善する必要を感じました。

当初は水と食料は各自で確保

水と食料は各自で確保

当初は水と食料は各自で確保することとされてきました。満足に水分補給もできない上に猛暑で疲弊する中、12日にいち早く県本部がスポーツドリンクを差し入れてくれ生き返りました。これを機に当局も水と食料を調達

台風15号で甚大な被害を受けた鋸南町で、鋸南衛生の組合員たちは、ごみ収集・処理に奮闘しました。組合書記長の青木さんに災害直後からの対応の様子や課題などをお聞きしました。

災害時に 直営の現業力

市原市職労現業評議会

自衛隊と連携し倒木を処理する市原の現業職員(写真右)



「道路維持25年の経験が活かした」 野本 議長

LINEで現場確認 停電で固定電話が通じず防災無線もダメでした。コピー機が動かず現場確認の地図が印刷できないため、地図を写真にとって携帯ア

プリのLINEで場所の共有を行いました。本庁との情報共有には苦労しました。道路維持管理にとっては倒木が大問題でした。大木が多かったため手持ちのチェーンソーでは長さが足りず、輪切りにしても手で運べる重さではありませんでした。幸い土木事務所にはアタッチメントを付け替えられる小型のショベルカーが一台あり、山道での作業に大活躍しました。



野本議長

が、その後、行政派遣が一気に入るようになりました。習志野市、船橋市、市川市から現業職員が車両に乗って応援に来てくれ、地元の直営職員が分乗して道案内をしました。市原市は、ごみを受け入れ焼却してくれました。組合活動ががんばってきた現業評議会の仲間が直接業務として支援してくれました。

道路維持25年。風による大規模な倒木というのは初めてですが、何度も災害は経験しており市内の状況や復旧までの流れはわかっています。迅速で確実な復旧のために知識と経験を持った現業職員が必要だということを訴えていきたいです。

とめ、住民の生活と命をまもっている直営現業職員の役割をアピールしていきたいです。



青木書記長

15日の日曜にようやく電気が復旧、翌週から焼却炉も稼働し始め、持ち込みごみの受け入れも始まりました。持ち込みは普段の4・5倍の件数と量のため、交代で昼食を取り夜遅くまで作業し、土日も全員が出動し対応しました。

直営があったから対応できた

労働組合への信頼が強まった

横断歩道

現評の仲間が行政派遣で来た

小泉進次郎環境大臣が、16日に突然やって来ました。しかも持ち込みごみで混雑しているさなかに、黒塗りの2台で大勢のSPを連れてきました。場内が混乱して迷惑しました。

これは大臣のおかげでもありますが、なんと言っても直営の現業の職場があったからです。父親の小泉純一郎さんをはじめとする現業の民営化攻撃とたたかい、組合ががんばって直営を残してきた事が災害時に生きたのです。

10月25日の豪雨では、道路があちこちで冠水して通行できず四苦八苦しました。そんな中訪問したお宅で、屋根が飛んで被災している高齢者が「大変だね」とねぎらってくれた。俺よりそっちの方が大変だろうと思うと、がんばらないわけにはいきません。

昨年、西日本豪雨の2ヵ月後、被災地域の方に会った際、「たいへんでしたね」と声をかけたところ、「今もたいへんなんですよ」と返答があり、被災地の大変さを考えさせられた。▼台風15号の被害にあい2ヵ月半が過ぎ、関連する報道は減ってきている。しかし、被災地はブルーシートのままの家が多く、自宅再建ができなかったり、農業など再開が困難になるなど、長期的な支援が必要になっている。自治体職場ではただでさえ人員不足の中で災害対策に忙殺され、毎日深夜まで、休日も出勤する日が続き職員の心と体の健康が心配だ。▼現地に支援に入って感じたことは、若い人を含めボランティアへ積極的に参加する方が多かったこと、国は被災者や防災対策にもっとお金を掛けるべきだということだ。地球温暖化の影響で、今後も超大型台風が襲ってくる。今回の災害の教訓を共有し、今後の備えをできるだけ早く作ることが、国や自治体、私たちに求められている。(H)